

日本の夜と「夜」の地理学

池田真利子

筑波大学芸術系

本特集号は、「夜」に関する国内研究が不足する現状と対照的に、現代社会において「夜」の時間－空間に対する意味付けがなされ、またその影響を受けて日本の、あるいはグローバル都市の「夜」が再編を迎えるなかで、地理学から、改めて「夜」を考察することを目的とした。本特集号で扱った題材は多岐にわたるが、手法は主として人文地理学（都市・社会・経済・エスニック・宗教・観光）と空間情報学である。社会的要請の強い空間情報とフィールドワークを主体とする地理学的アプローチ、そして人文的考察が、「夜」の研究の基にどこまで融合できるのかを巡る実験的試みでもある。

夜を日没という時間で定義するのならば、その天体条件は都市社会と自然環境双方に均質に訪れる。しかし夜における「明るさ」と「暗さ」は都市－自然、社会－環境においてそれぞれ異なった意味をもち得る。第1論文[池田ほか]は、本特集号の構成である都市社会（第2・3論文）と自然環境（第4・5論文）の二元論を超えるべく、夜の「景観」という切り口にて包括的議論を行ったものであり、それは最終論文である第5論文の主題である星空とも関連する。夜の暗さは「都市の明るさ」と不可分の関係において経済資源化され、都市の明るさはモダンの幕開けとともに啓蒙として歓迎されてきた。

ヨーロッパの都市社会は、太陽と月の周期性により労働と休息を切り替えるヨーロッパの農山村に比して、夜という時間に社会的意味を付与してきた。産業革命以降の都市社会では、一部の労働

者にとって夜は睡眠の時間から労働の時間へと変容した。また、都市労働により社会の時間感覚が規定され、都市娯楽が生み出された（Leisureの原型である *leisir / licere* は許可されたという意味を有する）。労働から束の間の休息を得られる時間帯において、酒は重要な意味を果たす。酒類を扱う店は、日没とともに営業を開始するが、それは人間が労働を終え、余暇に入る儀式でもある。

こうした余暇地域は、日本では「盛り場」と称され、東京の形成とともに、都市と郊外（かつての農村地帯）の結節点に形成された。新宿・渋谷・銀座では、夜間飲食施設が特定の地域に集中するが、それは、戦後闇市を巡る新宿の歴史や、高度経済成長期の契機となった東京五輪を契機に劇的に姿を変えた渋谷、あるいは明治から大正にかけて地方都市出身のモガ・モボの羨望を集めた銀座、という地域の歴史と無関係ではない[杉本ほか]。東京は、明治以来、浅草、銀座、新宿、渋谷と時代によって都市に群れる・集まる者／まなざしの前で演じる者を変え、またそれが「盛り場」の性質を変えていく。上野公園で開催された東京勧業博覧会のイルミネーションや銀座のネオンサインで輝くショーウィンドウは、20世紀初頭の東京においては非日常であり、また西洋らしさであった[池田ほか]。これは、東京五輪により選手村やスタジアムが建設された渋谷・原宿・代官山の都市発展とも関連する。他方でバブル期に入ると、船舶輸送のコンテナ化に伴い、遊休化した港湾部の貯蔵施設や未利用地には、夜景を観光資源とする飲食空間が創生されていく。そこでは、

港湾の夜景や解放感が非日常的な空間として消費される。近年、経済界では、ウォーターフロントの利活用が求められているようであるが、その背後には地権者や商店街の期待も込められている。それぞれにおいて、今後の研究蓄積が求められる。

他方で、24時間経済は日常的な景観でもある。「夜間経済」は消費喚起を狙った言葉であり、そこには非日常性の創出という意味合いも含まれる。しかし、現代社会で24時間営業を行う店は、コンビニや牛丼屋、レストラン、カラオケ等、極めて日常的な場所である。そうした店は、深夜労働し、朝に労働を終えた人間に束の間の休息を提供する〔金ほか〕。その意味で、夜の経済は、よりリアルな日本の経済の姿を示す側面がある。夜は経済的意味においては「非日常」であり、社会的意味においては「日常」となる。

こうした非日常・日常は、場所ごとに明確に分かれる訳ではない。そこにストーリー性が与えられれば、人間はそこから勝手に何かを読み取ろうとする。それは夜という時間に顕著であり、その場所に何らかのストーリーを付与する役割の人間が存在する〔池田ほか；矢ヶ崎・上原；卯田・磯野〕。これは人間が夜に方向感覚を失い、身の危険を感じやすいこととも関連する。夜の観光では、特にその地域に慣れていない人間にとっては水先案内人が必要となる。他方で恐怖に関しては、怪談や逸話がインターネットで参照され、トンネルや廃墟のような恐怖体験をイメージされやすい場所だけでなく、「日常」であるはずの都市部の公園やマンションのエレベーターも突如として恐怖が感じられる場所となる〔矢ヶ崎・上原〕。かつては自然と都市が交わる場所が、恐怖の対象となっていたというが、怪談すらインターネット（ここにはYoutube等のようなメディア媒体も含まれる）で拾い集める現代人の知覚は、どのよう

に変化しているのだろうか。闇にもまた、人間は何かを読み取ろうとする。闇の音は恐怖の感じ方をより一層鮮明にもするが、夜の音は長野県松川村のスズムシのように、地域の姿を現出させる役割を果たし、あるいは長崎県伊王島のエンターテイメント施設のように非日常性を演出する。視覚は夜、その役割を変える。

しかし、夜にだけ見えてくる景観がある。それは例えば、月や星空という天体であり、都市社会が意図せずに放つ光である。そこに人間は、自然らしさや都市らしさを読み取り、夜景100選や星空保護区のように価値付け、経済資源化していく〔池田ほか；卯田・磯野〕。星空を保護するための光害防止条例を全国に先駆けて制定したのは、岡山県井原市美星町（1989年）であったが、この時期の日本は都市がいよいよ求心力を強め、24時間経済に関心を向けていた時期でもある。都市社会の住民が都市の喧騒を離れ、より真正性のある自然をみたいと願う気持ちが、星空を眺める消費行為を促した可能性も否定できない。また、「星空保護区」の制定のように、星空保存運動の背景には、海外有識者・環境庁・行政・観光組合・インストラクター等、アクターごとに異なる考えが見え隠れする。例えば観光客に配慮した街灯整備や沿岸部の観光地化の推進と夜空の保存のせめぎ合いは、石垣島においてどのように行われるのか、さらなる研究が求められる。石垣島の夜空は、本島北部やその他の離島の人にとっては、「明るい空」なのである。

最後に、本特集号の著者・タイトル一覧を記載する。

- ・池田真利子：地理学から「夜」を考える－都市社会と自然環境における夜－
- ・池田真利子・坂本優紀・中川紗智・太田 慧・杉本興運・卯田卓矢：夜と景観－見えない夜と感じる闇－

- ・杉本興運・太田 慧・飯塚遼・坂本優紀・池田真利子：飲食店の集積と営業時間からみた商業地特性の分析－夜間の新宿・銀座・渋谷の比較－
- ・金 延景・中川紗智・池田真利子：エスニック都市空間の夜の領域性に関する一考察－大久保コリアタウンの夜間営業施設に着目して－
- ・矢ヶ崎太洋・上原 明：「夜」に対する人間の恐怖と好奇心－日本における心霊スポットとゴーストツーリズムの事例－
- ・卯田卓矢・磯野 巧：観光資源としての星空の構築－沖縄県石垣島における星空ツーリズムの発展を通して－
- ・池田真利子：日本の夜と「夜」の地理学

[付記]

本特集号は、日本観光研究学会研究分科会「ナイト

ライフ観光とナイトタイムエコノミーに関する研究」メンバーの研究成果の一部を集めたものである。同メンバーは20代から30代の若手研究者が主体である。2018年度から定期的に集まり、「夜」に関する議論や巡検を企画してきた。論文のなかには予察的論考に留まったものもあるが、夜の研究の発展に向けて、理論研究と共に、フィールドワークに基づく実証的研究が求められることは、本号の執筆者一同、肝に銘じたい。他方で、遠方から東京に駆けつけ、共同研究に参加してくれたメンバーもいる。この場を借りて、全員にねぎらいの言葉をかけたい。

また、第12回地理空間学会大会シンポジウムやEAJSにおいては、日本観光研究学会の経済的支援に依るところが大きく、また、本特集号の発刊においてはサントリー文化財団「学問の未来を拓く」（研究代表者：池田真利子）のお力添えを頂いた。改めて感謝を申し上げるとともに、「夜」の観光研究を通じて社会的に貢献することで還元していければと考える。「夜」の研究は萌芽的段階にある。地理学に限らず、夜の研究に関心を持って頂いた場合は、ぜひ連絡を頂きたい。

Geographies of the Night in Japan

IKEDA Mariko

Faculty of Art and Design, University of Tsukuba

